

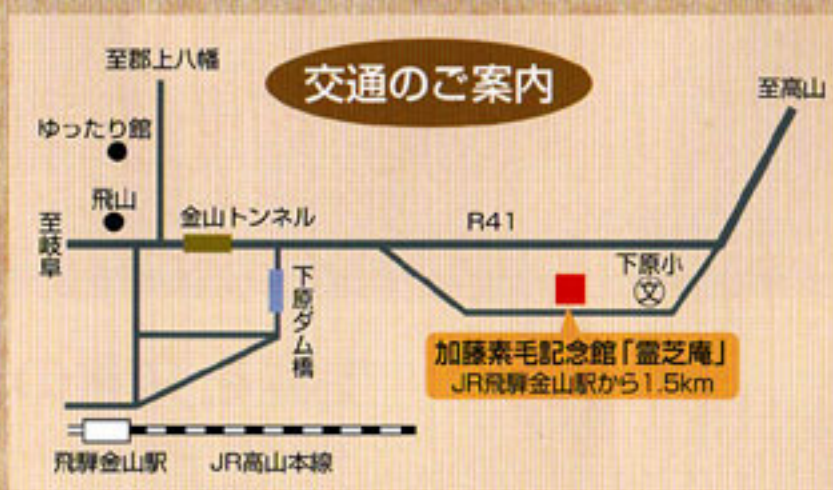


素毛の写真  
(米国で撮影したもの)



加藤素毛記念館「れいしあん靈芝庵」は、老朽化した素毛の生家を建て替え、平成十四年七月十五日にオープンした。  
「れいしあん靈芝庵」とは、素毛の雅号の一つから引用した名前である。俳句を好み、天性温和にして交際に長じ、時々漫遊を行っていた素毛は、紫色角形の靈芝（サルスベリ科の万年草）を珍蔵し常に携帯していたことから「れいしあん靈芝庵」と号していた。  
建て替えに当たり、刀傷のある柱や看板、テーブル、棚等の備品に旧生家の鴨居や柱の一部を活用した。また、駐車場内に埋め込んである石は、旧生家の位置を示す当時の塚石である。

加藤素毛は、文政八年（一八二五）下原郷十七ヶ村の兼帯名主を勤める加藤三郎右衛門雅文の次男として生まれた。  
万延元年（一八六〇）一月十八日、日米修好通商条約批准書交換のため、幕府遣米使節随員七十七名の一人として、米軍艦ホーハタン号で品川沖を中航した。ハワイ・サンフランシスコ・ニューヨーク等を巡り、喜望峯経由でジャワ・香港等に立ち寄った後、同年九月二十八日、無事品川港に到着した。素毛三十六歳の時であった。  
当時世界一周を果たした日本人はなく、この壮舉は国内最大の話題となり、素毛の雄弁な帰朝談は各地で大好評であった。  
素毛はたいへん筆まめで、見聞の総てを日記・和歌・俳句・絵画に書き残している。



岐阜県下呂市金山町下原町  
加藤素毛記念館「れいしあん靈芝庵」

開館日：毎月1日・15日

下呂市金山振興事務所内  
金山町観光協会  
TEL 0576-32-2201

かとうそもう  
加藤素毛記念館



旧加藤素毛の生家

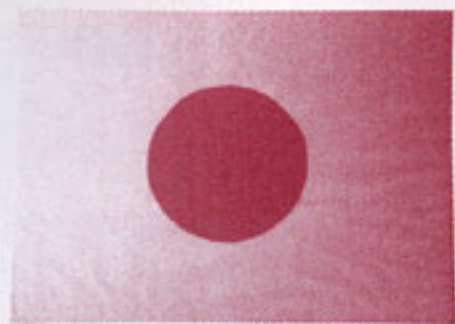


靈芝庵



靈芝の絵／素毛書





素毛が持ち帰った日米国旗（当時の合衆国星条旗は31州の星が円を描くように配置されている。）



遣米使節団が乗船して渡米した米軍艦ポーハタン号の模型。「靈芝庵」オープン記念として、帆船模型制作の第一人者である岡崎英幸氏（宮城県在住）に依頼し制作したもの。素毛が書き残した詳細なスケッチ画を参考に、約半年がかりで完成された。

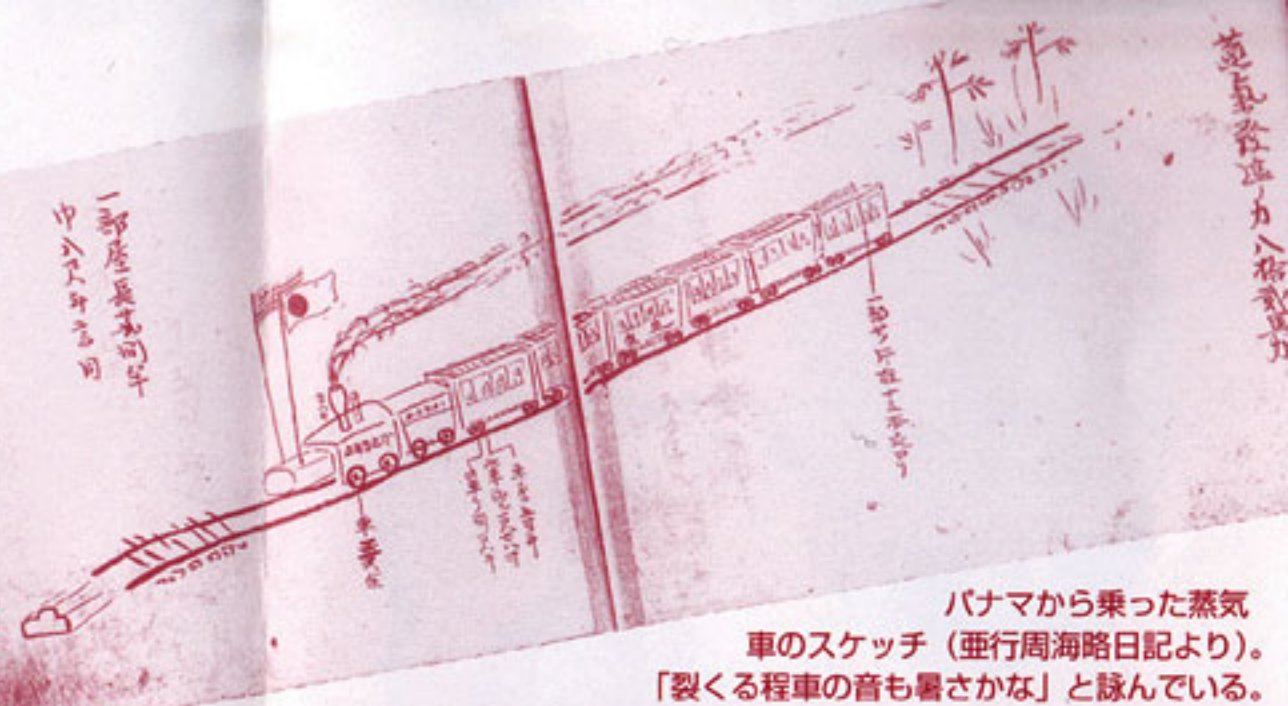


「幕末の三舟」の一人  
山岡鉄舟

### 素毛と山岡鉄舟

素毛は青年時代、高山郡代の公用人となり、郡代の子山岡鉄太郎（後の鉄舟）と親交を持つ。

一介無名の素毛が遣米使節団に加わったのも、高山以来の親友山岡鉄舟の絶大な協力によるものであった。



パナマから乗った蒸気車のスケッチ（亜行周海路日記より）。「裂くる程車の音も暑さかな」と詠んでいる。

### 出発から帰朝までの地図 （原文のとおり）



### 生涯を文雅の道に生きた俳人 加藤素毛

素毛家は、累代が「素」の字を冠した俳号を持つ家系で、風月を友とするにふさわしい環境で育った。23歳で高山へ出て飛騨郡代の公用人となり、国学・和歌・漢学を学んだ。嘉永5年(1852)高山役所を辞し、28歳で筑紫(九州)吟行の旅に出た素毛は、長崎に滞在中、異国文化に触れ、海外雄飛の目を開いたと思われる。

遣米使節団の一員に加わった素毛は、同行77名中最も筆まめであったといわれ、254日間にわたる周海3万里の行動・風物等見聞のすべてを、日記・俳句・和歌・漢詩・スケッチ等に克明に書き納めている。

靈芝(万年草)と蘭を好んで描き、独身を貫き、風月を友として詩歌、俳諧を楽しみながら各地の文化人と交歓した素毛。彼の学才は水戸の藤田東湖に匹敵する程の文化人であったが、政治には全く関与せず、一介の野人として異国文化の紹介に努め、文明開化に奇与したのであった。



素毛愛用の扇子

素毛が帰朝みやげに記念品として配った木版刷色紙「月ならで風船高し夕まぐれ」

